ほ

ぼいだす 「ぼふ」を見よ。

ほいちやう 都を知らぬ島夷(しまえびす)か泣くやら口説(くど)くやら、夥長(ほいちやう)夥長財附(ほう)、アアどうよくなこんばんにや、うんすんすんとひれ臥して(國性爺後日)

〔夥長〕西川忠英撰・華夷通商考巻二に「夥長(ほいちやう)=海上乘方を主とる者也。羅經(はり)の法を能く知りて日月星を計り天氣を考へ地理を察する役」。現今の支那音は hio chang といひ、組長、組合長、組頭の意。

***ほいい** 風折烏帽子に紋紗の布衣(松風)

〔布衣〕「ほい」とも云ひ、狩衣のこと。狩衣はもと布で作つたものであつたによつて布衣と云うた。德川時代になつては布でなくても無紋なるを布衣と云ひ、織紋あるを狩衣と云うた。

ほうおんかう 長柄の市郎右衛門といふ人報恩講の銀を盗み、親の勘當うけて白晝に在所を追拂はれた(二枚繪)

〔報恩講〕眞宗にて、親鸞上人の忌日(親鸞上人は弘長二年十一月二十八日に入滅された)に勤修する法會で、毎年十一月二十二日から同二十八日まで行ふ。これをお霜月ともいふ。(現今は新暦に計算し、或はそのまま新暦の日に行ふ)。ここに報恩講の銀といへるは、本願寺お茶所維持の冥加錢を講中の者から集め、この銀を報恩講の時に奉納するにつてかくいうたのである。

***ほうが** 鎌倉の大名衆方方をみつぎの爲、少しづつ奉加を致され集められたる金なれば(百日曾我) これは難波の御坊の御普請の奉加銀今ここに有合せた(冥途飛脚)

〔奉加〕神佛に寄進する財物に我が財物を加へること。神佛の爲に財物を集めることをも云ふ。寄進。

ほうき 守屋が蜂起五畿内なかば同意して、おぼつかなきこれ一つ(聖德太子)

〔蜂起〕歐多の蜂が飛起つやうに群り起るをいふ。史記・項羽紀に、「楚盜起之將皆爭附君者、以君世世楚將、爲能復立楚之後也」と見えてゐる。盜は蜂の古字である。「守屋が蜂起」は守屋が軍勢蜂起の意。

ほうげい これは天竺祇園精舍のほうげいにして、今この三界に並びもなみの立居に任せ(用明大皇) すはや御法ゝかいびやくの、ほうげいの聲告げ渡る(釋迦)

〔寶鯨〕貴重な梵鐘。鯨とは梵鐘をいふ。梵鐘の聲を鯨音または吼鯨などといひ、鐘銘集の中にも見える語である。祖庭事苑に「物類感志云、海岸有獸曰=蒲牢=而性畏=鯨魚=、食=於海畔=、鯨或躍蒲牢卽鳴、聲如=鐘=、今人多狀=蒲牢獸形=施=鐘上=、撞爲=鯨而擊之=、鯨本無=聲=、因=鯨躍=而蒲牢鳴=、故曰=鯨音=」。

***ほうけつ** 鳳闕の賢聖の障子をまなび(五人兄弟)

〔鳳闕〕禁裡をいふ。兩觀の闕閣くして上に銅の鳳凰を置けるが故にいふ。漢書・郊祀志に、「鳳闕高二十餘丈」。

ほうけふいんだらに 寶篋印だらに神咒を修行せば、人天の善果を受くる必ず疑ふこと勿れと(嵯峨天皇)

〔寶篋印陀羅尼〕陀羅尼はその條を見よ。陀羅尼の功德を比喩的に表して寶篋印といふ。寶篋印陀羅尼を唱へれば、その功力によつて墮獄の亡者も善果を得るといふ。「寶篋陀羅尼の大鎧」は、大鎧の貴重なるを形容したものである。

***ほうける** 病みぼうけて空耳でがなござりましよ(重井筒) よみとかうとに屋財家財負けぼうけ(大織冠)

〔惚〕惚くの延びた語。ぼんやりする。ぼける。

***ほうこ** (松風)

〔布袴〕束帶の裝で表袴の代りに指貫をはき、束帶に次ぐ服裝である。布製の袴のことではない。雅亮裝束抄下卷に、「布袴といふ事あり、衣指貫(きぬさしぬき)うるはしく着て、其の上に下襲(したがさね)着て、表の衣(うへ)(袍)に尻作りて、帶さして笏を持つなり」。桃華蘂葉に、「布袴(ほこ)(ほう)、常の袍に著=下襲=指貫=、是謂=布袴=、著用の事は可=隨=先規=也、布袴之時は無文丸鞠帶、野太刀を帶する由云云、又布袴に不帶=劍事=も有也」。

奉公かまひ 奉公構ひの御改易(丹波與作)

〔奉公構〕奉公を差止めて追放の刑に處すること。構とは、追放に處して其地に入るを得しめなかつた刑をいふ。

ぼうざや 下人に持たせし風呂敷より棒鞘の一腰を取出し、これはこれ信國とや(女腹切) たつた今一二下へ下つたといふ(雪女)

〔棒鞘〕刀鞘の素鞘。桂川連理柵(淨瑠璃)帶屋の段に、「兄長右衛門は棒鞘の一腰にさしつまる」。

***ほうしや** 右大將頼朝公、南都の大佛御再興ましまし既に成就と訴ふれば、供養の報謝に急ぎ大赦を行ふべしと(出世景清) 俄に剃髪仕り武藏坊辨慶といふ今道心、ちと御ほうしやに御首を入れさせ給へと(吉野忠信) 如何なる御憎しみ御恨みも虎・少將に御ほうしやあり、時致樣を御免あらば(國八景)

〔報謝〕恩を報じ德を謝する義。喜捨。教行信證に、「深知=佛恩=、爲報=謝至德=」。

ほうしよ 湯の煮立つもうらやましく心までこそこほりけれ、これぞ寶所の宿りと思ひ(姫)

〔寶所〕珍寶の所の義、以て安樂所の意にいふ。法華經・化城喩品に、「欲=過=此道=至=珍寶所=……若能前至=寶所=、亦可=得=去」と見え、「寶所在=近、此城非=實=」とも見えて、無上正覺をいうたのである。

ほうず もとお氣のむずぼほれ、何がな興あるお慰み、御心だにほうじなばお藥も廻らんとのこと故、不調法な歌三味線(國八州)

「飜ずの音便であらう。ひるがへす。轉じる。

ほうせんくわ (振袖始)

〔鳳仙花〕一年生草本、高さ一二尺に達す、花は葉腋から生じて紅色、紫色、白色などである。

〔鳳仙花〕

ほうそ　ほうそ雨しただりし彼の瀟湘の夜の雨も、これにはいかで憂るべき（百合若）

「ほうそう」（蓬窻）の「う」の略されたもの。苫を覆うた舟の窻をいふ。苫を覆うた舟の窻に雨の軍の垂れ落ちる。謠曲・三井寺に、「蓬窻雨しただりて馴れし汐路の船枕」。蘇軾の詩に、「蓬窻高枕雨如繩」。

ほうだたり　「はうだたり」を見よ。

＊ほうちやく　百億のほうちやく、那由他の羅網（酒呑童子）　玉をいろへて造りたてたる臺には金のほうちやく銀の風鈴（大原問答）

〔寶鐸〕風鐸とも鈴鐸ともいふ。大形の風鈴にして堂塔などの簷に吊すもの。

＊ほうど　和藤内ほうどくはを抜かし（國姓爺）　約束きつと堅めよと、れだれ返して詰めかくる、倶牟波羅ほうと詰りしが（鶴迦）　新開殿お取次よいやうに頼み申すとにちかけける、新開ほうどもてあつかひ（百日曾我）

「ほうと」と「と」に濁點のないのもある。ほとほと。ほとんど（殆）。（生玉心中・上巻に「めつかうほうど喰はする」とある「ほうど」は、ぼんと叩く音を形容した副詞で、ここにいふのとは別。

ぼうぼうまゆ　御身代りは紅梅と覺悟しても地下の女、后様には似付くまじと恐れながら御顔に似せ、ぼうぼう眉とやら額に引き（弁筒）

〔鵝鶏眉〕堂上方の眉づくりである。稍不整な半月形で、眉頭は圓くして少しく尖り、眉尻は扁に圓く、上部は白際にて缺げ、半月眉よりも上品である。大田南畝撰・増訂一話一言・巻十二に、「堂上眉のこと。三歳五歳にても奉内あれば眉を取り給ひ、十七歳の時眉を立て給ふ、これを御月（是を天上）（眉と云ふ）を付けらる」。

棒まかれな　「まかるな」を見よ。

＊ぼうらい　これ嗚まだ蓬萊は飾られども、先づ正月の心・三方飾つて持つておぢや（夕霧）

〔蓬萊〕蓬萊臺。日次紀事（延寶年中成）正月元日の條に「蓬萊臺。倭俗新年三方臺置海老・蒟蒻・橙・穂俵等、先供賀客、祝新年、是謂蓬萊臺」。（日本永代藏所載）

〔蓬萊臺〕

ぼうらいわうぼ　（松風）

〔蓬萊王母〕蓬萊山に住する西王母といふ仙女。蓬萊山は支那傳説で、海中にあつて神仙の住むといふ山。「せんかのじつげつ云々」を見よ。

ぼうらくづきん　「はうろくづきん」を見よ。

＊ぼえる　何ぬかすやら頷き合ひ、拜む囁くほえるざま、胸を押へ擦つても堪へられぬ（天網島）　お慈悲お慈悲とほえづらかく（女殺）　鄭成功頼み奉ると、ほえづらかいて頼むなえ（國性爺後日）

〔吠〕「ほゆ」の訛。聲を上げて泣くを罵り氣味にいふ語。「ほえづら」とは聲をあげて泣き顔。狂言・二千石に「討つて棄てらといふのにほゆるは、國許に殘しおいたる妻こ・子供に名殘が惜しいか」。心中天網島のこゝの文に、拜み呀きほえるざまと束ねて餘裕を思はしめる書き方をしないで、拜む（ざま）呀く（ざま）ほえる（ざま）と、昂奮せる治兵衛の眼に小春の動作が一一獨立してうつる心理狀態を描寫した妙文は、修辭上に於ても巢林子の非凡の才を認められる。

＊ほかゐ　法界ほかゐの御回向偏に頼み奉る（卯月調色）

〔行器〕外居とも書いてある。餅、赤飯、饅頭の類、此等食物を容れて運ぶ器。圓くして高く、蓋ありて紐で結ぶやうにし、外方へ反つた三脚がある。古くは脚の無きものもあつた。總て黑漆塗または蒔繪などあつて大小一定しない。こゝの文は道具屋に纏ある行器を法界にひつづけたのである。

ほぐし　民をたすけて山田もる火串の光明明として（百日曾我）　照射する火串の影のねらひ獵（會稽山）

〔火串〕松に脂火して串にさしたもの。獵夫が鹿の火に寄るを待つて之を射るのである。

ぼくしゆ　周の武王は木主を作つて殷の世を傾け（女楠）

〔木主〕神主卽ち位牌をいふ。「周の武王は木主云々」を見よ。

＊ぼくせう　近頃乏少輕微ながらこれ今晩の進上と、館の前にかつぱと投棄て（女夫池）　某が寸志計と乏少の音物披見せよと（三國志）

〔乏少〕些少。輕少。易林本・節用集に「乏少」。俚言集覽に「乏少。乏は呉音ボフなれども、轉音にて「ボクと呼べり」。北史に「糧食乏少」。

＊ぼくち　懐中より火打にぼくち打出し（氷朔日）

〔火口〕燧火をうつしとるもの。いちび殻などから製す。

＊ぼくと　北斗の光鮮に晴れ渡れば（會稽山）

〔北斗〕天の北極から約三十度の距離にある七つの星の群をいひ、北斗七星ともいふ。

〔北斗〕（俗云破軍凱鋒）

＊ぼくば　玄上牧馬の琵琶二面取つて押合せ（源義經）

〔牧馬〕昔あつた琵琶の名器の名。古今著聞集・管絃歌舞の條に「牧馬」のことが記してある。

＊ぼくめん　誰かある、北面だち近う參つて名所名所風景を御物語申されよ（象姫）

〔北面〕北面の武士で、院の御所の北面に居て院中を警衛する武士である。源平盛衰記に、「北面は白河院御宇より始め行はれ、衛府其數多ありけり」と見えてゐる。北面の武士は上下の二階級に分れ、四位・五位を上北面といひ、六位を下北面といふ。

＊ぼこしゆもない　あり様だちはあつたぼこしゆもない、朋輩どもとかけどくに道中雙六打つて、沓の錢ほどしてこませうと思うたに（丹波與作）

「ぼこしもない」「ぼつこしゆもない」「ぼつこしらもない」などともいうてある。蓋し「ほこらしらもない」（無可救）の略訛した語であらう。勇み立つべくもない。つまらない。面白くもない。御前義經記（正德二年刊）二之巻、待夜のすごろくの條に「繼は遠いが花ぢやと世を憚らぬ物語、ほこしもないおいてくれ」。碁盤太平記（巢林子作）に「狀ことづかつて草臥ながら、ぼつこしらもないと持つて來る」。

日本西王母（巢林子作）に「たれぞと思へば氣違ひ女ぢや、はれやれやれぼつこしもない」（天智天皇（巢林子作））に「打てども叩けども進まねば馬方怒つて、エエ畜生めこりやあ、えだ骨が折れたかぼつこしゆもないとぞうちにける。

*ほこら　四所明神の黑木のほこら、雪は白木綿・藤は幣（大織冠）

「ほくら」（神庫または倉庫を訓んである）の轉。神祠または叢祠をいふ。小社は器物を入れ藏く倉庫の形に似てゐるにより轉じて小社をいふに至つたのである。「四所明神」は春日社をいふ。春日社霜月の祭禮には、黑木の柱に青松葉の軒の假宮を造る古例である。

*ほごり　この金を、この儘置けば揚屋の庭錢、ほこりになつてすたります（壽門松）　二千貫足らずの商ひに九貫目のほこりを取り（萬年草）

〔埃〕埃錢。殘餘の錢。和訓栞に「算にほこりといふは奇異なり、或は疎略とも見えたり」。「九貫目の埃」といへるは、前文に「年々の殘銀九貫五百匁。百六十兩で帳消して」とあるに應じる。金一兩を銀六十匁替として、百六十兩は銀九貫六百匁となる。故に作右衞門は支拂額よりも百匁多く與治右衞門に渡したのである。ここに九貫目の埃といへるは大歌をいうたので、實は九貫六百匁出してゐるのである。

*ほざく　ヤア餓鬼も人數、しほらしい事ほざいたり（國性爺）　ヤアこりや縛付けられた、扨は盜みほざいたな（天網島）

曳言に人の物言ふを「ほざく」といふ。ぬかす。ひろ〻。ほえる。勇巴堂嵐吹撰・姿記評林の序に「同志空人叢吼夢梓行・于世云々」とありて、吼にホザクと振假名を附けてある。和訓栞に「ほざく。火裂の義、心火の裂出る也といへり、俗に情を隱さずして物を言ふをほざくといふも同義なるべし」。

菩薩の六度　菩薩の六度ももとは慈悲（蘖靜）

菩薩とは、菩提（卽ち覺知）の大道を求め、衆生を攝化する慈悲の大願を成就せうとして、修行する大士の稱。その修行に布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜ある。波羅蜜は譯して度または到彼岸といひ、生死の海を渡つて涅槃の彼岸に到る義である。

*ほしかぶと　折を得て互に見まくほし兜（用明天皇）

〔星兜〕兜の鉢に鐵の如き凸形の銀鋲數多打つたのを星兜と云ふ。こゝの文は「見まくほし」に「星兜」をいひかけたのである。

ほしがむめ　彼の唐土に名を得たるほしがむめをぞ懸けにける（大掛物）

「わうしがむめ」（王氏が梅）の誤であらう。王氏は王冕、字は王章、明の人で梅を畫くに妙を得た畫師である。

*ほしつきよ　鎌倉の星月夜、堀居彌五郎殿と申す御方より、急用の御狀とてことづかりしと置いて行く（碁盤太平記）　星月夜の編笠や、鎌倉山を夜ぬけにして（最明寺殿）

〔星月夜〕星月夜木の間暗の意より、木の間暗を鎌倉に通せて鎌倉の枕詞として用ゐる。

*ほしやう　稻田姫尊の仰を蒙りて歩障の蔭より聲作り（日本振袖始）

〔歩障〕白布帷を懸けて衝立の用をなすもの。和訓栞に「和名抄に喪禮圖を引て白布帷以障二婦人一今按俗用二歩障一是と見えたり」。

*ほそどの　（用明天皇）

〔細殿〕和名抄に廊を訓んである。殿から殿に渡る廊をいふ。

*ほぞんかけた　オオほぞんかけた

る時鳥、あやめの沼は水淺しと（女楠）

杜鵑の啼聲がかく聞きなされるといふ。俚言集覽に「てつぺんかけたか。杜鵑の鳴聲のかく聞ゆといふ、關東にてはホゾンカケタカといふ」。蓋し杜鵑を冥土の鳥といふにより、その啼聲が本尊懸けたかと聞えるも心からのわざである。

ほだ　ほだ押除けて柴の小枝を押折り押折り焚き給へば（川中島）

薪木をいふ。和訓栞に「ほだ。材木のきれをいふ、榾柮也といへり、もと山里にてゐろりにくべる木をいへば火立の義なるべし」。

*ぼだい　菩提の種や上寺町の長安寺（曾根崎）

〔菩提〕梵語（Bodhi）である。正覺などと譯す。眞如の理を覺り道の極位に到達する聖智をいふ。無量壽經註に「菩提正覺佛異稱、聞法爲二種發心一爲芽」。悟をひらいて佛門に歸依するを菩提心を發起するといふ。

ぼだいじゅ　菩提樹の木蔭とは、藤の鳥居に藤咲きて（天智天皇）

〔菩提樹〕東印度原產の常綠喬木、大なるは十丈を超え、葉は卵形で長き尖端を有し、花及び果實は天仙果に似る。この樹梵名Pippalaといひ、往古釋尊難行の後この樹下で成等正覺して佛陀と成られたが故に、この樹は神聖な樹木として東印度の寺院には必ず植えてある。

*ほたえる　あんだらめには拳一つ當てずほたえさせ、萬事に遠慮が皆身の仇（女殺）　かしましいあたり隣もあるぞかし、餘程にほたえあがれ（女殺）　お前は何處ぞ脇で遊んで下さんせと、いへどもほたえた

顏付にて（天網島）　こりやんほたゆるなと、又引つかついで投げたが（博多）

「ほたゆ」、「ほたゆる」ともいふ。あまえる。つけあがる。ざれたはむれる。和訓栞に「ほたゆ＝俗語なり、ほたえるともいへり、えるる反ゆなり、ざれたはむるを上方にほたえるといふ」、と見えてゐる。按じるに、新撰字鏡に「嘿＝誇語也、保太支天云」、とあるのと同類の語で、誇りかにいふ意より轉じて、つけあがる、あまえる意となり、更にふざける意になつたのであらう。

*ぼだし　山だし七十五人して挽いたる楠木にてあげぼだしをうたせ（出世景清）　弟のいや若はほだしの足にいだきつき、痛いかや父上様（出世景清）

羈絆の義。新撰字鏡に「鏁」をホダスと訓んである。木を足に結付けて自由のきかぬやうにすること。

ほたりこむ　こめ（博多）

はふり（拋）込む。投げ込む。この長崎國訛は現今も長崎地方で用ゐられ、又鹿兒島では「ほたい込む」といふ。

ぼたんつと　柳のさげ髮ぼたんつと、さも若若しく結び立てて（井筒）

〔牡丹髻〕牡丹花の如く脹らんだ髻。

ぼたんとぢ　亭の戸口を開くる花の、ぼたんとぢの陣羽織、大口の切袴熨斗附（國性爺後日）

〔紐釦綴〕紐釦で綴ぢたのをいふ。「ぼたん」はホルトガル語Botaoである。こゝの文は、花の牡丹に紐釦綴をいひかけたのである。

ぼつかける　「ぼふ」を見よ。

＊ほつき 尾上の松の下やどりも石上樹下のいましめと、心とどめず行ひし兵藤太入道が發起心こそゆかしけれ（用明天皇）誓紙を書いての發起心母に渡されしが、まだ御覽なされぬか（天網島）その方も發起して今の誓文立てるからは熱い事はあるまい（氷朔日）

〔發起〕發ニ起菩提心ニの略。證道欣求の志を發起する義。佛道に歸依するをいふ。また轉じて迷を斷じ悔悟の心を起すをいふ。

＊ほつく 彼のやうにほついては、やんがて身代は木賊色でおろすやうになつてのけうと笑ひける（重井筒）稼ぐほど費ひほつく（女殺）ほでてんがうの貧乏神、何もかもほつきあげ（丹波與作）

「ほつく」の轉、脫解盡の義。金錢などを浪費す。つかひ果す。東海道名所記（萬治元年成）に、「馬を賣りてその代をほつきあげ、手と身とになりて戻るもあり」。浮世親仁形氣（寛保元年刊）三之卷、酒を樂しむ賢人親父の條に、「親仁が金をほつく故程儲けても尻も結ばぬ絲にて、針を藏に積んでもたまらぬと云々」

ほつけせんぼふ 五七日には妙なれや法華懺法（蟬丸）

〔法華懺法〕天台宗にて六根の罪を懺悔する爲に法華經を讀誦し供養する法式。

ぼつこしうもない 「ぼこしゆもない」を見よ。

ぼつこしもない 「ぼこしゆもない」を見よ。

ぼつこしゆもない 「ぼこしゆもない」を見よ。

ぼつこむ 「ぼふ」を見よ。

ほつしやう 「ほふしやう」を見よ。

ほつしり おさゐは椽先に家内は寂入り、ほつしりと何を思ふと咎め人の、無きが我が家の取得にて（鍵櫂三）

欄干に立ちつくして、そなたの空をほつしりと、打咳ぶきて面痩せて（用明天皇）

つくづくと思ひ入るさまにいふ。しみじみ。雅筵醉狂集・冬の部に「木の葉散る草の庵はほつしりと、廣山の昔思ひやられて」。

＊ほつしん 御聲はなほ近近と、本有毗盧の法身大日覺王如來の加護（嵯峨天皇）

「ほふしん」（法身）の促音便。法を體とせるもの、義で、毘盧の法身とは佛陀の覺を いふ。

＊ほつしん 筑紫の果まで修業して、發心の因緣は如何した事か知られども（薩摩歌）さる仔細にて發心し（賀古教信）

〔發心〕發菩提心の略。世捨人となつて佛道修業の心を起すこと。

＊法施 あづまの明神に暇の法施をまゐらせ（曾我扇八景）神慮の御蔭あら有難やと手を合せ、しばらく法施を奉り（根元曾我）禪師おつつけ本堂にて名殘の法施を奉り、直に罷立ち申さんと（加增曾我）

〔法施〕語佛妙善の法を以て人の爲に說くこと。轉じて神佛に物を捧げること。大智度論に、「佛說施中、法施第一、何以故、財施有ノ量、法施無ノ量故」。

ほつたい 「ほふたい」を見よ。

＊ぼつたてる 百千の獸をぼつたてぼつたてて、くるりくるりと巖に追ひ上げ追ひ下し（田世景清）出家侍・犬畜生餘すまじと、ぼつたてぼつたて叩きたて（女楠）揃ひも揃うた供廻り……、二行に立つてぼつたてろ、承り候と、お先手の手振の衆（國姓爺）

「おつたてる」（追立）の轉。現今も中國其他の地方では「追ふ」を訛つて「ぼふ」ともいふ。「ぼふ」の條見よ。

「二行に立つてぼつたてろ」とは、供廻り奴が二列に並ぶつて、手振り揃へて追つ立て先拂せよとの意。「あかさかやつこ」の條を參照せよ。近松作・雙生隅田川第二に、「敵は糠味噌おつたて汁」とあるのも、糠味噌汁は奴の常食であり、「ぬかみそ」の條を見よ。また奴は行列作つて、先のけろ振り込めさで主君の供先をするから、「糠味噌汁追つ立て」を「糠味噌おつたて汁」と、例の近松の洒落た筆法（大工さかもり）「くねんぼあたま」などの條を參照せよ）であつて、「おつたて汁」は、この名の汁があるのではない。

ぼつつむ 「ぼふ」を見よ。

ほつて 矢止り金物・押附の板・發傳・高紐總角附（女楠）

〔發傳〕鎧の胴の背面の最下部を胴尻とも發傳ともいふ。軍用記・附圖、當世具足之圖に、胴の背面の最下部に、「ドウジリホツテトモ」と書いてある。本朝軍器考卷九には、「胴の終りの板をば、古にはいかにや云ひけん未だ見る所あらず、臆病金などいひしは後の終りとぞ聞ゆる、今は前のかたを保天左幾といひ、後のかたを胴尻といふにや」と見えてゐる。

ぼつとりもの 戀知りの初樣とて、町一番のぼつとり者お目にかけんと縋付く（曾根崎）君は和國のぼつとり者（薩摩歌）お年を八十取つて除け跡が十七花ざかり、ぼつとり者のしなもの樣おやちよいちよいとぞ譽めにける（井筒）

婉美柔和な女。安原貞室撰・かた言（慶安三年刊）に、「ぼつとり。やはらかにいとほしき形か」。旅枕（元祿八年刊）に、「これは衣裝とてもけばけばしからず、無地の小袖に紋所、扨は兩面の茶などを好み、顏の容態白くけはいなさず、ただ底清らに拭きたて、物を醉にして聲高からず、あるかなきかに居て歌草紙とても人より跡に引退き、いとけなき者なんど見てはさも愛らしく、召使ふる人にも睦じき氣立やと思ふなる、これぼつとり樣なり」。元祿太平記（元祿十五年刊）卷二に、十王の嗚・娘・侍女等に冥官どもがからかうた言葉に、「ぼつとり者やしな者と惡口言うてほめにける」と見えてゐる。御前義經記（正德二年刊）卷一、傾城の因緣の條に、「前漢書とやらに李夫人といふぼつとり者のしなものゝほめ詞に、北方有ノ佳人、絕世而獨立、一顧傾ニ人城、再顧傾ニ人國ニ云々」。

＊ほて ヤアほてがくれるわい、小行過ぎた前髪の撮み出してくれうと、肱を張れば（孕常盤）供吟味の奉公人と同じ樣に食はんとは、ほてのくれる奴めがある（加增曾我）

腹をいふ。和訓栞に、「讒內中國四國に腹をほてといふ、東國にはほてといはず」。「ほてがくねる」とは、腹筋が縒れる意、可笑きに堪へぬをいふ。

＊ほて 郎等ども兩方より懷へ手を入る、惡しかりなんと振放し、男

たる身のいき懐へほでをさすは何事と言捨て逃ぐるを（賀古教信）　腕なしの臆病者ほでにもあはぬ太刀さんまい（根元曾我）

「うで」（腕）をいふ。手。「ほでてんがう」「ほでぼし」（各條を見よ）などといふ「ほで」も手である。義經千本櫻・第三に、「デモ冷いほでぢやと手を引いて女房諸共立帰る」。いろは日蓮記（近松門左衛門作・並木宗輔添削・文政三年刊）に、「東條左四郎景成が念を懸けたる女房、命にかけて奪ひしものやみやみと下種のほでに渡さうか」。

ほてい　布袋は唐子のお媛役（隅田川）　乗物の戸八文字に開かせ、布袋乗に乗りたるは（會稽山）

〔布袋〕支那明州奉化縣の僧、名を契此と云ひ、體軀肥大で便々たる腹垂れ頤る異形である。常に一杖を携へ布囊を負ひ、一切供身の具を囊中に藏し、能く人の吉凶及び時の晴雨を豫知し、彌勒菩薩の化身であるといふ。我國では七福神の一として俗間に祀る。「布袋乗」とは布袋和尚の坐せるやうに悠然として乗ること。

***ほてくろし**　ああほてしろし放さんせ（隣廛歌）　結構なお若衆の兄様とは添い添い冥加ない、手附に一寸ほてくろしい事御免御免、牛兵衞様も氣をお通しとべつたり抱附き（宵庚申）　我が物顔にほてくろしい此長文（枹狩）

腹黒しの義。腹きたなし。みつともない。人目はづかしい。物類稱呼巻一、人倫、腹の條に「ほてくろしと云は、枕双子に腹、黒とあるに同じ」。義經千本櫻・第三に「此間はほてくろしき淫穿鑿、生捕りて面恥と存じたに」。

***ほてつぱら**　剰へほてつぱら・壁に茶壺とやら、今になつてお暇下されとや（娘）　其ほてつぱらくり拔いて遣らんものと（隅田川）　ほてつぱらがくれる（融大臣）　すないやいほてつぱらめと振りぎる（丹波與作）　エエ、どんな、けたいのわるいほてつぱらめと鞭を打ち（西王母）

腹り腹の轉訛で、太つ腹に同じであらう。腹れ腹。人を罵り、又は馬を叱るにもいふ。「ほてつぱらがくれる」とは腹立ちむくむくする意。室町殿日記・九、鹿苑院殿に打手をつかはす條に、「えいというてひく間に、ほて腹のただ中を彼方へ通れと突き拔きければ」。和訓栞に「ほたえるをほてともいふ。ほたえ反てなり、馬子の馬を叱るにほてつぱらと云ふも此意なるべし」。俚言集覽に「ほてつぱら＝腹の大なるをいふ、布袋和尚の腹といふことにや」。この語現今も信州北安曇郡小谷（佐野坂以北）地方で、太腹の意に用ゐてゐる。

***ほでてんがう**　ほでてんがうの貧乏神、何もかもほつきあげ（丹波與作）　此女中は添くもうぬが小錢で買ふ樣な賣物でない、ほでてんがうかわかすと通れ通れ（酒呑童子）　ほでてんがうおきをれと、二人が刀蹈落し（蛙合戰）　鉦の拍子も出合ごんごん、ほでてんご念佛に仇口嚙交ぜて（天網島）

「ほでてんご」ともいふ「ていたづら」（手悪戯）の義。（「ほで」は手をいふ。「ほで」を見よ）いたづら。じやうだん。俚言集覽に「ほでてんがう。いたづらをする事、京にていふ」。

ぼてふり　ヤアぼてふりの賣人め、弓取の法は知るまじい（孕常盤）

「ぼうてふり」（棒手振）の「う」の略された語。振り賣。非原西鶴撰・本朝二十不孝・巻之五に、「まづ出暫時までは棒手振なりとも致されよ」。傾城播磨石（寶永四年刊）巻二、せいのつく物やまのいも牛蒡の條に、「世におちぶれたれば是非もない事、いとしやぼうてふりなどさぞやしともなう御座らうと」。方竟白翁撰・俳諧自娯文艸・商の巻に、「袋に予が隣家に袴販あり、究て貧者なるが、鶏眼とやらんを患ひて」。現今千葉縣山武郡地方にて、魚賣人を「ぼてふり」といふのもこの語である。

ほでぼし　あた見苦しいほでぼしにて尾籠のはたらき致しなば、片つ端眞甲を打割り捨てんと反を打ち（十二段）　平家方のへろへろ武士理不盡に出でよとて、穢はしきほでぼしにて三衣を破りし故（伊豆日記）

「うでぶし」（腕節）の訛。「ほで」「うでぼし」を見よ。

ぼてれん　それから身持になつたやら、ぼてれんぢやと腹さすり（萬年草）

女が子を孕んで腹の脹れたるをいふ。この語現今も往々用ゐてゐる。

***ほとおる**　御目の中は朱をさす如く、額に亂るる汗の玉、ほとおりわななく御惱み（浦島）

「ほとほる」の訛。熱氣立つ。「ほとほる」ともいうてゐる。傾城島原蛙合戰に「只今蛙の鳴く聲御耳に入ると等しく玉體ほとほり以ての外の御惱み」。

ほとけだふし　島主が眞甲にうらをかかせてはつしと立つ、大事の手になればたまり得ず佛倒しにかつばと臥す（聖德太子）

〔佛倒〕佛像の倒れるやうに、膝も曲げないで其體横倒れになること。

佛の三十二相　「さんじふにさう」を見よ。

ほとけのみて　輓けや輓けやこの車、ひくや佛の御手の絲（小栗判官）　柴栗小栗操返し、絲に縋れや佛の手（嵯峨天皇）

〔佛御手〕彌陀如來の御手。「佛の御手の絲」とは、彌陀如來の御手に懸れる絲をひかへて、彌陀に緣を結び引接を乞ふのである。榮花物語に「御堂殿臨終の時、御手には彌陀如來の御手の絲を引かせ給ひ」。嵯峨天皇甘露雨のこの文は、彌陀如來は御手に絲を垂れ給へるによつて「絲に縋れや佛の手」というたので、「佛の手」に佛手柑をきかせたのである。

***ほなが**　内儀はあつと讓葉に穗長折敷く橙・柑子（タ霧）　女子亭主の譯よしが穗長の煤を打拂ひ、人に情を掛鯛のむしり肴と春めかす（氷朝日）

〔穗長〕齒朶。和訓栞に「ほなが。絡注草也、穗長の義、正月に用るは瑞穗の長大をいはふ成べし」。

***ほのじ**　じつと見かはす顔と顔、互に領く花薄、ほの字を中に籠らせて（振袖始）　晩には梅の木の枝おろそ、ノンヤホノンヤホ、のんやほのじとたはぶるる（西王母）

〔ほの字〕「ほれる」（惚）の頭音を取つて、惚れる意にいうたのである。日本西王母のこゝの文は「女中のすきの云々」を見よ。沖に縱路の云々」をも見よ。

＊ほばしら 焦れ船でも何船でも手前に帆柱持合せず(雪女) 松風を取つて引除け、帆柱立に突立ちしは只木像の如くなり(松風) 前に與兵衛帆柱立ち、跡に二王の張番立ち(女殺)

〔帆柱〕帆柱の如くに突立つことを帆柱立といふ。「帆柱持合せず」とある「帆柱」は陰莖をいうたものである 色里三所世帯(貞享五年刊)大坂の巻に「一日やとひの船頭も異な所に帆柱を立て」、とある帆柱も陰莖を勃起させたことをいうたのである。

ぼひあぐ 「ぼふ」を見よ。

＊ぼふ すれる男をぼつかけて、そこらそこらをすんずと飲ましやる(生玉) 博雅の三位が庵とはこれならめ、ぼつこんで打取れといふ程こそあれ(鰡丸) どつこい遣らぬとぼつつめ、小藤太がかんづか摑んで取つて引伏せ(扇八景) ヤイ男ども隣の明屋の二階へぼひ上げ、下にきつと番をせい(大經師) 分別も何もいらぬ、ぼひ出して退けさつしやれ(女殺)

「おふ」(追・逐)の訛「ぼつかけ」は追掛け、「ぼつこむ」は追込む、「ぼつゝめ」は追詰め、「ぼひ上げ」は追上げ、「ぼひだし」は逐出しである。

＊ぼふいん 異名を白稻荷法印と申す、今の世の流行山伏(女殺)

〔法印〕僧位。慈德兼備の高僧これに任ぜられる。轉じて法印の位でない僧・修驗者を法印といふこともある。釋門事物紀原に、「僧正、僧都・律師・法印・法眼・法橋を僧綱といふ。」

ぼふかい 法界ほかゐの御回向偏に頼み奉る(卯月潤色) どうで湯か茶か呑みにであろ、法界の男ぢやと思へば濟むと恨みながら(重井筒) 法界順逆結緣(娘) あれは人の法界悋氣(淀鯉)

〔法界〕一切衆生色心の本體である。起信論に「心眞如者卽是一法界、大總相法門體」と見えてゐる。故に宇宙一切萬有皆法界内にあつて、悟の見地より萬有の總體を法界といふ。

「法界の回向」とは、法界衆生平等利益の供養をいふ。

「法界の男」とは、内外の差別なく内を外と、平等無差別に浮かれ歩く浮氣男の意。

「法界順逆結緣」とは、十方法界のあらゆる衆生は、その順緣なると逆緣なるとを問はず、皆因緣を結ぶによつて成佛するの意。

「法界悋氣」とは、彼此の差別なく起す悋氣の意。己に何の關係もなきに起す嫉妬心。

ほふざう 提婆達多は八萬法藏を讀み覺え、三千世界にあらゆる學問つくすといへども(釋迦)

〔法藏〕法は佛の教法、藏は含藏の義である。許多の法門を藏する經典聖教を總稱して法藏といふ。八萬法藏」とは、八萬四千の法藏をいひ、八萬はその大數を擧げたのである。法華經・見寶塔品に「持二八萬四千法藏十二部經、爲人演說」。源平盛衰記卷十九、聞性八員を檢する條に、「八十の壽命をたもつて、八萬の法藏を說き給へり」。「法藏比丘の淨瑠璃云々」をも見よ。

＊ほふしやう 法性の理體を指して玉と名付け(大織冠) 法性無漏の智惠の火は石にあるか燧にあるか(釋迦) 法性隨妄の雲(一心五戒魂)

〔法性〕諸法の體性、卽ち宇宙の本體の意であつて、眞如または眞理と云ふに同じ。

「法性隨妄の雲」とは、無明迷妄の眞如を掩ふを雲に譬へていうたのである。「眞如廣大なれば云々」を見よ。

ほふせ 「ほつせ」を見よ。

＊ほふたい おことは法體しけるよな(烏帽子折) 親御達は御隱居、髮を下して樂樂と御法體の筈なれども(氷朔日) 元服なりともいつそ又法體なりとも成されませいと(加增曾我)

〔法體〕薙髮して法衣を著け僧侶の姿となること。

ほふだうせんにん 抑も播州法華山觀音寺の開基法道仙人そのかみ異邦にうつり(西王母)

〔法道仙人〕もとは天竺の人、紫雲に乘り支那・朝鮮を經て日本に來り、播州法華山に住して法華經を讀誦した。白雉元年天皇の勅により、法道の爲に法華山に寺院を建立され、法道持する所の觀音の銅像を安置した。後に法道は空中に飛去つたといふ。詳しくは元亨釋書、本朝高僧傳を見よ。

＊ほふねん 善導か法然の化身であらうと申した(薩摩歌)

〔法然〕名は源空、崇德天皇長承二年四月美濃國稻岡の莊に生る。九歲の時父故あつて人に殺された爲に源空出家し、十三歲で比叡山に登りて源光に從ひ、十八歲の時黑谷に住して叡空の門下となる。爾後經論を研鑽し、遂に念佛門に歸して淨土宗を開立した。建曆二年正月八十歲で洛東大谷の禪房に入寂した。元祿十年勅して圓光大師の謚號を賜ふ。

＊ほほ とてもの事にべべ脫いで母がほほに抱かんと(賀古教信) 初に逢ふ夜のほほの内、嫁御の心はばづかしく生きた思ひも候まじ(一心五戒魂)

「ふところ」(懷)をいふ。「ふところ」を轉訛して「ほところ」といひ、その首音「ほ」を躍らせて「ほほ」といつた小兒語である。小兒語につきては「とど」の條を見よ。俚言集覽に、「ほほ。懷をほほと云、江戸鄙俗小兒の言にぽつぽと云。」

ほほぐすり 湯水を求めほほ藥樣樣扱ひ給へども(大原問答)

〔重皮藥〕厚朴の樹皮から製した風邪の藥。榮花物語・見はてぬ夢の條に、「絅心地なほ惡しう思さるれば、絅風にやなど思して、ほほなどまゐらすれど、更におこたらせ給はず」。同書・若水の條に「絅風にやとてほほなどきこし召せど、怠らせ給はず」。和名抄に「本草云厚朴一名厚皮 漢語抄云保々加之波乃木。釋藥性云重皮保々乃可波」

＊ほほげた いき女郎め吐すまいと誓文立てて口がため、憎いほほげた(女殺)

〔頬桁〕頬骨をいふ。頬輔。つらかまち。

「ほほぐすり」を見よ。

ほほやく 「ほほぐすり」を見よ。

＊ほむら 昔の井筒の女とやらはねたみのほむらに提子の水が湯となつた(大經師)

〔焰〕ほのほ。火燄。和訓栞に、「ほむら。神代紀に火炎をよめり、火籠の義なるべし、靈異記に焰もよめり」。「提子の水が湯となる」をも見よ。

＊ほやほや まだほやほや笑うて居るやうな(日本武尊)にこにこほやほや會釋こぼして御機嫌取り(振袖始)胸つぶつぶしうほやほやしやりめす(女護島)

笑ひ、また嬉しがるさまにいふ副詞。平家女護島のこの文は、勿體なさに胸潰れるやうで嬉しう存じますとの意。

＊ほゆ これ死にます死にますお助けと、ほゆるも構はず前へかつばと突き伏せ（女護島）

「ほえる」を見よ。

ほらどこ 奥に入れば洞床に香花を供へ（三國志）

〔洞床〕床の間を緣側まで延ばし、緣側の部分の前面を壁で塞ぎ、下地窓をあけて洞の如くしたもの。

＊ほろ 玉のやうなる上臈を母衣の如くに負びなして（兼好）

〔母衣〕鎧の背に負ひ、大袋のやうな物で、矢を防ぐ具。竹を骨とし布を被して闘くし、肩と腰とに紐で結付けるやうにしてある。

ほろぶにち 終に命のほろぶ日（大經師）

〔滅日〕「めつにち」ともいふ。大雜書（寛永十一年刊）に、「めつ日とは月のめぐみの不足なる日なり、大惡日よろづにわろし、正日にあらず」。この文は大經師に緣ある曆上の語で飾つた厭離しの祭文である。

ぼろぼろ 光明丸が頭をこそげずぼろぼろにしたがよい（賀古教信）是は上方より奥へ通る行脚のぼろぼろにて候（源義經）

梵論梵論の略か。虚無僧の類である。刀を差し尺八を吹き、深編笠を被り蓬を負ひ、人の門に立つて物を乞ひつつ諸國を遍曆したものである。ぼろぼろ草紙に、虚空房といふ者、力强く髪長く、一尺八寸の太刀をさし、同行衆を從へぼろと稱して諸國を巡つたことが書いてある。徒然草・第百十五段に、「ぼろぼろといふ者昔は無かりけるにや、近き世にほろんじ、梵字、漢字などいひけるもの其はじめなりけるとかや、世を棄てたるに似て我執深く、佛道を願ふに似て闘諍を事とす、放逸無慚のありさまなれども云々。

＊ほろろ 雉にほろろの聲あつて、雪はふるとの心あり、讀み下せば高島亡ぶる調伏（反魂香）彼の茅原にほろろうつ、かびしやら鳥があさりして（釋迦）

ほろろうつなどともいうて雉の羽うつ音である。古今集・卷十九、雜體・誹諧歌に「春の野のしげき草葉の妻ごひに、飛立つ雉のほろろとぞ鳴く」。傾城反魂香のこの文は、「ほろろ」と雪はふるの「ふる」に續ければ「ほろろふる」（亡）となる故に、讀み下せば……亡ぶるといふのである。

＊ほん 今日爰へおぢやつたは天神様の御利生、神も佛も馴染がほん、親父の見世の燒物に一文づつでも天神様、お馴染故ちやと言ひければ（生玉）人は次第に身を持上げるがほんなれど（生玉）

〔本〕眞實。本當。「馴染がほん」とは、馴染のあるのが本當に頼もしいとの意。西鶴の諸士産卷四、江戸の小主水と京の唐土との條に、「何につけても馴染がほんなり」。なほこの文は、そなたが今日天滿天神社内の茶屋に來て私と逢うたのも、思へば親父の店にある價一文のおもちやの天神樣の燒物でも、そのお馴染のあるお酒による引合はせで、神佛も馴染があるのが眞實頼もしいと言うたればの意。

＊ほんあみ これは本阿彌の屋作りと目利したるも理なり（雪女）

〔本阿彌〕刀劍鑑定の家元である。その祖を妙本と云ひ、龜山院の頃京都の人。その子孫に本妙、妙大、妙秀、妙喜、本光等があり、慶長頃の光悦は有名である。

＊ほんう 本有の月の光かすかにして、いまだ三毒四慢の大虚に出でず（一心戒魂）佛法にては本有の毗盧遮那（蟬丸）

〔本有〕本來具有の義。本來固有の性德をいふ。

ほんけかへり 年積つて六十一歳、本卦還り未の白髭（大織冠）

〔本卦還〕生れた干支の歳に六十一年で還る故に、六十一歳を本卦還といふ。還曆。

ほんこむろ あれあれあそこへ唄うて來る、本小室のひんぬきは、與作與作と小手招き（丹波與作）

〔本小室〕純粹の小室節。この馬士唄は信州北佐久郡小室宿から唄ひ初めたものだといふ。小室は淺間山麓に近い町で、輕井澤・沓掛・追分の三宿を經て此の町に懸る、古くは小室と書いてコムロともコモロとも稱したが、今は小諸と書いてコモロといふ。小室節の元唄は「小室出て見りゃ淺間の山に、けさも煙が三筋立つ」といひ、また「小室出て見ゃ、淺間の山に、けさも煙が三筋立つ、天に昇りて雲となる」といふ。元來馬士唄であるから踊の手は無い。この唄は寛文頃から寶永頃に亘つて最も流行し、馬方などの唄うたものである。傾城金龍橋（近松作狂言本・寶永五年作？）第一に、「老人十二三の小馬子と現じ、小室節で追つて行く」と見え、人倫訓蒙圖彙・三、馬方の條に、「馬方節とて一ふし有は船頭に船歌あるが如し、……當世は只辰巳あがりの聲して小室節なり、こゑ高にして何事にも先片肌ぬぐは彼等の風俗なり」と見えてゐる。聲曲類聚に、「小室節その始め並に名稱知るべからず、今も諸侯入府の節は御馬前に立ちて謠ふとかや」。續猿蓑集・卷下、雜春の部、山秀の句に「春の日や茶の木の中の小室節」。

巢林子のここにいへる本小室は、「拠も見事なソンレハおつづら馬や、七つ蒲團にソンレハ曲象すゑて」（歌謠部「拠も見事な云々」を見よ）といふ馬士唄を本小室節で謠うたことをいひ、今まで待たれ尊されてゐた主人公丹波與作は、その謠ふ本小室節が聞えて、その姿を現はすのである。

ぼんじのみやう 僧正騷がず酒水の印を結んで梵字の明を修し給へば（天神記）

〔梵字の明〕「ばんじのみやう」を見よ。

盆正月の十六日 藪入は女夫連れでの約束の、盆正月の十六日を待ち樂しみし我が、哀れ地獄の釜の蓋開くを待つべき罪人と（今宮）

盆・正月の十六日は藪入の日である。この日は人々仕事をやめて休息する日なれば、古來地獄の釜の蓋の開くのも明く日だといはれてゐる。傾城吉岡染（巢林）にも、「あらかしがまし釜の蓋、いつか明くべき七月の十六日も程遠き」と見えてゐる。日次紀事（延寶年中成）七月十六日の條に、「藪入。洛外洛内男女遊樂、是稱二藪入一、同二于正月十六日一、神社井寺院男女參詣、寺僧各修二法事一」。和漢三才圖會、時候部に、「走百病。按正月十六日庶民之子女及奴婢以二此日一爲二間暇一、免二父母家一自在遊戯或詣二寺院一、近年七月十六日亦然也、蓋此以二于蘭盆一出二於慈愛一、終爲二春秋一度、矣、俗謂三之藪入一、如二孤獨一者無可二歇佐一家上唯入二藪杯中一遊亦隨意、以爲二樂之調一乎」。

＊ぼんしやくにてん 梵釋二天に手を引かれ奉り（歌念佛）

〔梵釋二天〕梵天と帝釋天。

ぼんしゆ 梵衆梵輔大梵天（天神記）

〔梵衆〕梵衆天の略。色界初禪の第三天である。

＊ぼんしん　ぼんしんの習ひ目の前の怒止み難く（薩摩歌）　あだとは知らぬ凡夫心、サア今宵こそ早歸つて明日の晝まで緩りと寢よう（生玉）

〔凡心〕凡夫心。卽ち迷妄に掩はれて悟らぬ人心。大乘義章に、「凡は謂く生死凡鄙の法、夫は謂く士大夫凡法夫を成すが故に凡夫と曰ふ」。

＊ぼんそう　茶の湯を上手になさるるゆゑ、人の用ひほんそうもある（鍵權三）

〔奔走〕走りまはり世話する義より轉じて、愛しいつくしむこと。昨日渡今日能物語（古活字版）に、「今ほど世間に手かがみがはやる、色々さまざまの古筆をあつめてほんそうする中にも、この衞殿の御しゆせきほどみごとなるはあるまいと沙汰する」。

ほんぞんかけた　いで此笛にて時鳥のまねを吹き呼出し見んと横たへて、ほんぞんかけたとかすらせ吹きけし（天鼓）

「ほぞんかけた」ともいふ。その條を見よ。

ほんだはら　祝うて何處も吉野榧かちぐり、嘘でござらぬ本俵、春盤に土器、さすぞ盃ちよつと押へて（壽門松）

〔本俵〕「ほだはら」（穂俵）ともいひ、馬尾藻の別稱で、正月蓬萊飾などに用ゐる。

＊ほんぢ　聖德太子の御本地は靈山淨土、三界の敎主世尊の御事なり（卯月紅葉）

〔本地〕佛が本有の妙理に契合せる眞實究竟の地位をいひ、垂迹に對する語。

＊ほんぢん　江戸へ通しの馬追うて本陣に泊るが（丹波與作）　本陣宿の忙しき、數多の出女下僕（嫗山姥）

〔本陣〕往時大小名其他武家の公用旅舍を本陣と稱した。地方によつては現今もなほこの稱の殘つてゐる旅館がある。本陣とは本營の義で、戰國時代行軍の詞の殘れるもので、貞治二年三月足利義詮上洛の時、その旅舍を本陣と稱して宿札を揭げたるに始まると云ふ。

＊ぼんてん　上は梵天帝釋、下は四大の文言に（天網島）

〔梵天〕大梵天王をいふ。色界禪天の第一位の大梵天の君主で、佛敎保護の神である。其形相は四面三目四臂を具有し、帝釋天と共に佛像の左右に侍してゐる。「しだい」をも見よ。

＊ほんなは　町人の分でなぜ本繩で縛つた、……只の町人と違うて禁中の役をすれば、本繩にかけても大事ない（大經師）

〔本繩〕罪人を縛るに公の時にする本式の繩の掛け方をいふ。（私の時にする略式な縛り方を假繩といふ。）

ぼんのくぼ　三百石から馬追まで成下るぼんのくぼ、よい事はない筈と思はなんだは身の不覺（丹波與作）

〔盆窪〕頸の後面の中央の窪んだ處。和訓栞に「缺盆の穴などよりいへる詞なるべし」と見えてゐる。往時人相見が盆の窪の形によつて其人の運不運を相したによつて、盆の窪を運命の意にいふ。

ぼんほ　梵衆梵輔大梵天（天神記）

〔梵輔〕梵輔天の略。色界初禪の第二天で、大梵天の輔相である。

ぼんぼりわた　ぼんぼり綿もひれくろしく（女暖切）　妻は渡世の塗桶に、丸綿ぼんぼり額綿（女夫池）

綿帽子の一種。御所女中・武家・町家の婦女の被り物で、丸綿を薄く透した質朴なものである。思ふに「ぼんぼり」はぼんやり卽ち朦朧の義で、丸綿の薄く透いてゐるよりの名であらう。蟻遊笑覽に、「ぼんぼり綿は丸綿の薄く透いたるをいふにや。續山井、うす雲はぼんぼり綿か月の面有。又後撰夷曲集、遠山のいただきにあれは面白くぼんぼりと見た雪の綿かな水。天和笑委集・上野花見の女を云内、御所女中は……ぼんぼり丸綿わけよくかぶり……」と見えてゐる。

ぼんまうきやう　梵網經を和らげ、古今集十戒の和歌を引き（兼好）

〔梵網經〕羅什三藏譯、梵網經盧遮那佛說菩薩心地戒品の略稱。二卷より成り大乘律と四十八輕戒を說いてある。

ほんらいいつとく　まづ初月は一氣胎中に孕まれ、其形恰も鷄卵の如し、これ本來一とくの精水、形に取つては混沌未分（蟬丸）

〔本來一德〕本來先天的に備はれる一の德。懷胎十月の由來を述べたる蟬丸のこのあたりの文は、甲子祭（天和四年刊、淨瑠璃・加賀掾正本）の第五に見えてゐる文と大同小異である。

本來の面目　坐禪の床に本來の面目を悟る折柄（躑躅）

自己の本分などの意であつて、禪門法度の極度を示せる詞である。

ま

＊まいあひ　異形は手を伸べ、檢非違使がまいあひを割れて退けと噹と打つ（二枚繪）

「まあひ」ともいふ。眉間卽ち「みけん」である。「まひごみずな」を見よ。

＊まいごみずな　さてきやつまいす坊主（并筒）　徳を飾りて名を求め、名聞まいすの嘘つき（兼好）

〔まいす〕賣僧の宋音。賣名の俗僧或は商賣して利得をはかる僧の義。僧を罵つていふ。

＊まうご　なう死人に妄語は無きぞとよ（卯月淵色）　まうごかい（宵庚申）（三世相）

〔妄語〕虛妄の言語。「妄語戒」とは虛僞の言語をなしてはならないとの戒で、佛法で五戒の一である。

＊まうしゅん　（雪女）

〔孟春〕孟は始の義。春の始卽ち正月をいふ。禮記・月令篇に、「孟春之月、日在畢」。

まうぜい　めぐりめぐりて輪廻を離れぬまうぜいの雜兵、切拂つた山姥が悴（弘徽殿）

猛勢に妄執をもちつたのである。妄執は煩惱心深く執つて捨てることのできないこと。

まうそう　雪の内に筍出で、金の釜を掘出せし孟宗郭巨に優つても（百合若）

〔孟宗〕支那二十四孝の一人である。吳の江夏の人。其母病臥して珍しい物を好み冬筍を求めた。宗雪中竹林に赴いて哀泣天に訴ふ。この時筍雪中に生じた。孟宗竹といふ名は之に因すといふ。

まうぼ　正行は孫子が智、母が敎は孟母が仁（女楯）